京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-5

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　二〇二〇-五

平安京右京一条四坊二・七町跡

平安京右京一条四坊二・七町跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京一条四坊二・七町跡

2021年

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

序　　文

京都市内には、いにしえの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、校舎増築工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

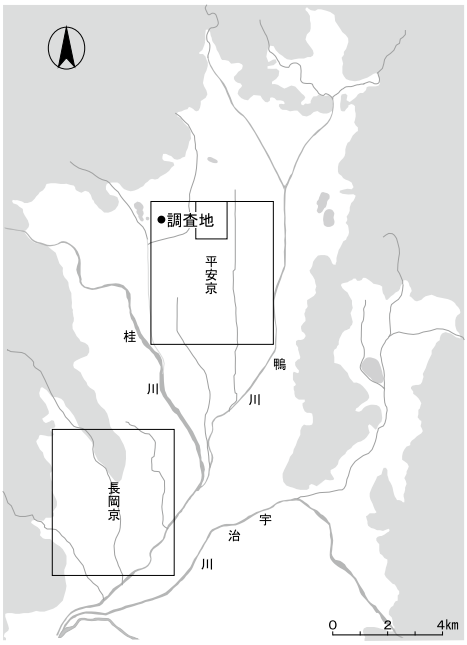
令和３年１月

公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

所　長　　井　上　満　郎

例　　言

1	遺　跡　名	平安京跡　（京都市番号　19Ｈ470）
2	調査所在地	京都市右京区花園木辻北町１－１他
3	委　託　者	学校法人花園学園　理事長　栗原正雄
4	調 査 期 間	2020年７月６日～2020年８月12日
5	調 査 面 積	268㎡
6	調査担当者	小檜山一良
7	使 用 地 図	京都市発行の都市計画基本図（縮尺１：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
8	使用測地系	世界測地系　平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
9	使 用 標 高	T.P.：東京湾平均海面高度
10	使用土色名	農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版　標準土色帖』に準じた。
11	遺 構 番 号	通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
12	遺 物 番 号	種類ごとに通し番号を付し、写真番号も同一とした。土器類は番号のみとし、瓦類は「瓦」、金属製品は「金」、銭貨は「銭」を前に付けた。
13	本 書 作 成	小檜山一良
14	備　　考	上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。
15	協　力　者	調査に際して、以下の方々にお世話になりました。感謝申し上げます。 関 宏幸氏（学校法人花園学園）、藤田宗裕氏・津田章彦氏（宗教法人妙心寺）、鈴木久史氏（京都市文化財保護課）



（調査地点図）

目　　次

１．調査経過 …… 1
（１）調査に至る経緯 …… 1
（２）調査の経過 …… 2
２．遺　　跡 …… 4
（１）遺跡の位置と環境 …… 4
（２）既往の調査 …… 5
３．遺　　構 …… 8
（１）基本層序 …… 8
（２）遺構の概要 …… 8
（３）平安時代の遺構 …… 8
（４）鎌倉時代の遺構 …… 11
（５）室町時代の遺構 …… 11
（６）江戸時代の遺構 …… 12
４．遺　　物 …… 16
（１）遺物の概要 …… 16
（２）土器類 …… 17
（３）瓦類 …… 18
（４）金属製品 …… 23
５．ま と め …… 24

図　版　目　次

図版１　遺構　１　調査区全景（南西から）
２　溝140（北から）
図版２　遺構　１　溝13（北から）
２　井戸131（東から）
３　井戸142（北西から）
図版３　遺物　瓦類
図版４　絵図　『正法山妙心禅寺塔頭総図』　安政６年（1859）　妙心寺蔵

挿　図　目　次

図１　調査位置図（１：5,000）　……　1
図２　調査区配置図（１：500）　……　2
図３　調査前全景（南西から）　……　3
図４　調査状況１（北東から）　……　3
図５　調査状況２（北から）　……　3
図６　生徒発掘体験（東から）　……　3
図７　周辺調査位置図（１：2,500）　……　5
図８　調査区西壁・南壁断面図（１：60）　……　9
図９　遺構平面図（１：120）　……　10
図10　溝140断面図（１：50）　……　11
図11　柱穴96実測図（１：40）　……　11
図12　土坑78・104断面図（１：50）　……　13
図13　井戸131・142実測図（１：50）　……　14
図14　溝13実測図（１：50）　……　14
図15　溝102・107断面図（１：50）　……　15
図16　土器実測図（１：４）　……　17
図17　瓦類拓影及び実測図１（１：４）　……　19
図18　瓦類拓影及び実測図２（１：４）　……　20
図19　瓦類拓影及び実測図３（１：４）　……　21
図20　瓦類拓影及び実測図４（１：４）　……　22
図21　金属製品実測図（１：２）　……　23
図22　銭貨拓影（１：１）　……　23
図23　遺構変遷図（１：300）　……　25

表　目　次

表１　遺構概要表　……　8
表２　遺物概要表　……　16

平安京右京一条四坊二・七町跡

１．調査経過

（１）調査に至る経緯

調査地は、京都市右京区花園木辻北町１－１他の花園中学高等学校内に所在する。学校法人花園学園により校舎増築工事が計画された。当地は平安京右京一条四坊二・七町跡及び菖蒲小路跡にあたることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）により試掘調査が実施され、土坑や溝などの遺構が検出された。このことから文化財保護課は、発掘調査が必要と判断し、調査は学校法人花園学園から委託された公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

調査の目的は、平安京跡に関連した遺構の確認である。また、史跡妙心寺境内からは外れているが隣接地であり、かつて塔頭の存在を示す史料も残されていることから、これに関連した遺構もあわせて確認し、当地の歴史的変遷を明らかにすることを目的とした。

図１　調査位置図（１：5,000）

（２）調査の経過

調査区は、文化財保護課の指導により学校敷地の南西部に設定した。面積は約268㎡である。

調査は2020年７月６日から開始し、重機により現代盛土を掘削し、以降は人力で調査を行った。地表下約0.7ｍ（標高約46.2ｍ）の地山層上面で、平安時代から江戸時代の柱穴・溝・土坑・井戸などを検出した。調査中の排土は、調査区北側に仮置きし、調査終了後は埋戻しを行った。遺構の記録は、随時実測図の作成、写真撮影を行い、必要に応じてオルソ測量を実施した。

調査中は適宜、文化財保護課の臨検・指導を受け、さらに検証委員（龍谷大学の國下多美樹氏、立命館大学の木立雅朗氏）による検証を受けた。

なお、調査中の７月31日に花園中学高等学校の生徒16名の発掘体験を受け入れた。

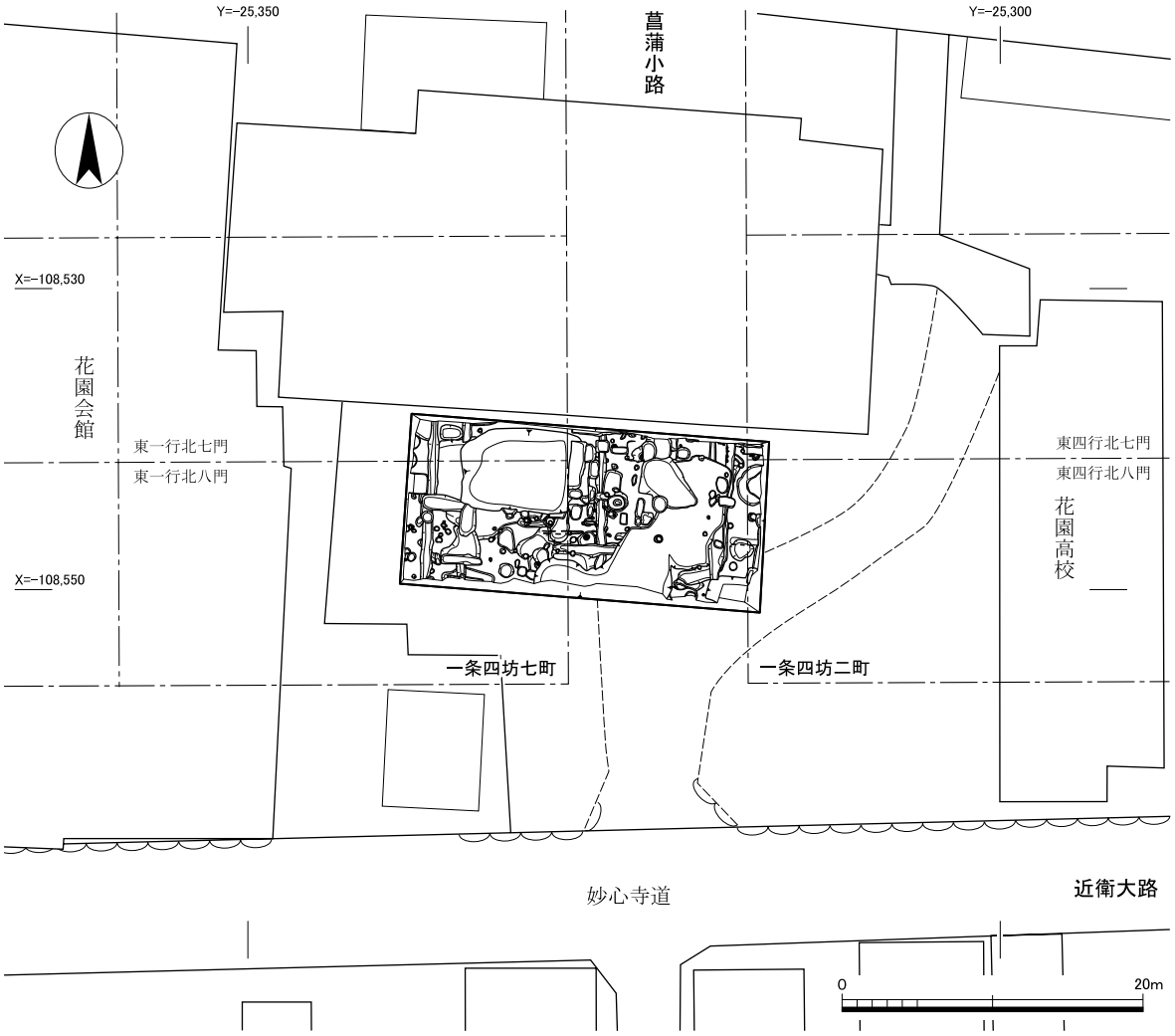


図２　調査区配置図（１：500）

図３　調査前全景（南西から）

図４　調査状況１（北東から）

図５　調査状況２（北から）

図６　生徒発掘体験（東から）

２．遺　　跡

（１）遺跡の位置と環境

調査地は、妙心寺境内の東を限る宇多川の東側に位置する。この地は明治時代末期までは、光國院や麟祥院などの妙心寺塔頭が存在しており、妙心寺旧境内に含まれる。現在は花園中学高等学校の敷地内にある。調査対象地の南側は妙心寺道（下立売通）に面しており、西には花園会館、北と東には花園中学高等学校校舎が建っている。

調査地は、京都盆地北西部の北から南に広がる台地（低位段丘）上に立地している。妙心寺北門付近の一条通が標高約60ｍ、南門付近の妙心寺道が標高約48ｍで、妙心寺境内の高低差は南北約530ｍの間で約12ｍとなり、かなりの傾斜がある。現在の妙心寺境内の東側には、宇多川が開析した谷地形がある。宇多川は水流が豊富であったため深い谷地形を形成したが、特に西岸は台地縁辺部を浸食し、比高約６ｍの高い崖面を形成した。この崖は、南にいくほど高低差を減じていき、調査区付近の妙心寺道より南側では目立たなくなる。

妙心寺境内では、平安京造営以前に遡る遺跡の存在は知られておらず、付近においても、200ｍ東側に古墳時代後期の花園遺跡[1)]が知られる程度で、平安京以前の遺跡の分布密度は比較的低いといえる。

調査地のある右京一条四坊とその周辺には方８町域を占める広さの天皇が耕す籍田があり、後に花園上皇の「花園離宮」と呼ばれた離宮や左大臣源有仁が白河院により賜った「池館」と呼ばれた邸宅が営まれたとされる[2)]。

室町時代に開山する妙心寺の境内は、平安京右京北西部に該当し、右京北辺四坊の８町域と右京一条四坊北半部の８町域の合計16町域という広大な面積を占めている。北端は平安京の北限である一条大路（現在の一条通）、南端は近衛大路（現在の妙心寺道）に面し、南北約530ｍ、東は大雄院の東端から西は大法院の西端まで、東西約450ｍある。妙心寺の七堂伽藍の南北主軸は、右京一条四坊九・十町の西半部中央のやや西に位置し、北で西に２度10分ほど振れている。この方位は平安京条坊の振れとは一致しないため、尾根筋の地形に規制されて主軸が決められたと考えられる。同様に、境内に配置された各塔頭の区画や規模をみても、ほとんど平安京条坊と一致していない。このことは、妙心寺が寺域を広げ、境内各所に塔頭が置かれた頃には、すでに平安京の条坊による土地区画は遺存していなかったことを示すものであろう。

妙心寺は、臨済宗妙心寺派の大本山であり、山号は正法山と号する。寺域は広く、北端は一条通の北側から南端は妙心寺道（下立売通）の南側にまで及び、境内には46の塔頭寺院が配されている。また、下立売通の南には慧照院・龍華院・春浦院など境外塔頭も所在する。

妙心寺は花園上皇の花園離宮を元とする。花園上皇は建武２年（1335）落飾して法皇となり、花園御所を禅寺に改めた。建武４年（1337）、開山に関山慧玄が推挙され、この年を開創年次とする[3)]。しかし妙心寺六世の拙堂宗朴は、足利氏に反旗を翻した大内義弘と深い関係があったため、足利義

満の怒りを買い、応永６年（1399）には寺領は没収された。拙堂宗朴は青蓮院に幽閉され、寺号は龍雲寺と改名させられた。永享４年（1432）には寺領が返還され、七世の日峰宗舜によって復興された。応仁の乱（1467～1477）で伽藍は焼失したが、細川勝元・政元の支援で復興し、文明９年（1477）には九世の雪江宗深が後土御門天皇から妙心寺再興の綸旨を得て、妙心寺は再興された。永正６年（1509）には利貞尼が仁和寺領の土地を買い求め、妙心寺に寄進した。これにより妙心寺の境内は西へ広がった。その後、桃山時代から江戸時代初期にかけて、周辺の土地の買収を行い、今日見るような広さとなった[4)]。この後、豊臣家や細川家などの有力大名の庇護を受けて七堂伽藍が整備され、江戸時代を通じて大いに栄えた。ちなみに、現在の七堂伽藍のうち勅使門は慶長15年（1610）、三門は慶長４年（1599）、仏殿は文政10年（1827）、法堂は明暦２年（1656）、大方丈は承応３年（1654）、小方丈は慶長８年（1603）、大庫裏は承応２年（1653）の建立である。

（２）既往の調査（図７）

調査地周辺の右京一条四坊周辺では、これまで発掘調査や試掘調査、立会・詳細分布調査が実施され、各時代の多岐にわたる遺構が検出されている。今回は四坊二町・七町周辺で行われた調査を集成し、主要な調査成果について概観する。調査は花園中学高等学校の敷地内で実施されたものが多くを占める。図中の調査番号は、本文中の番号と一致する。

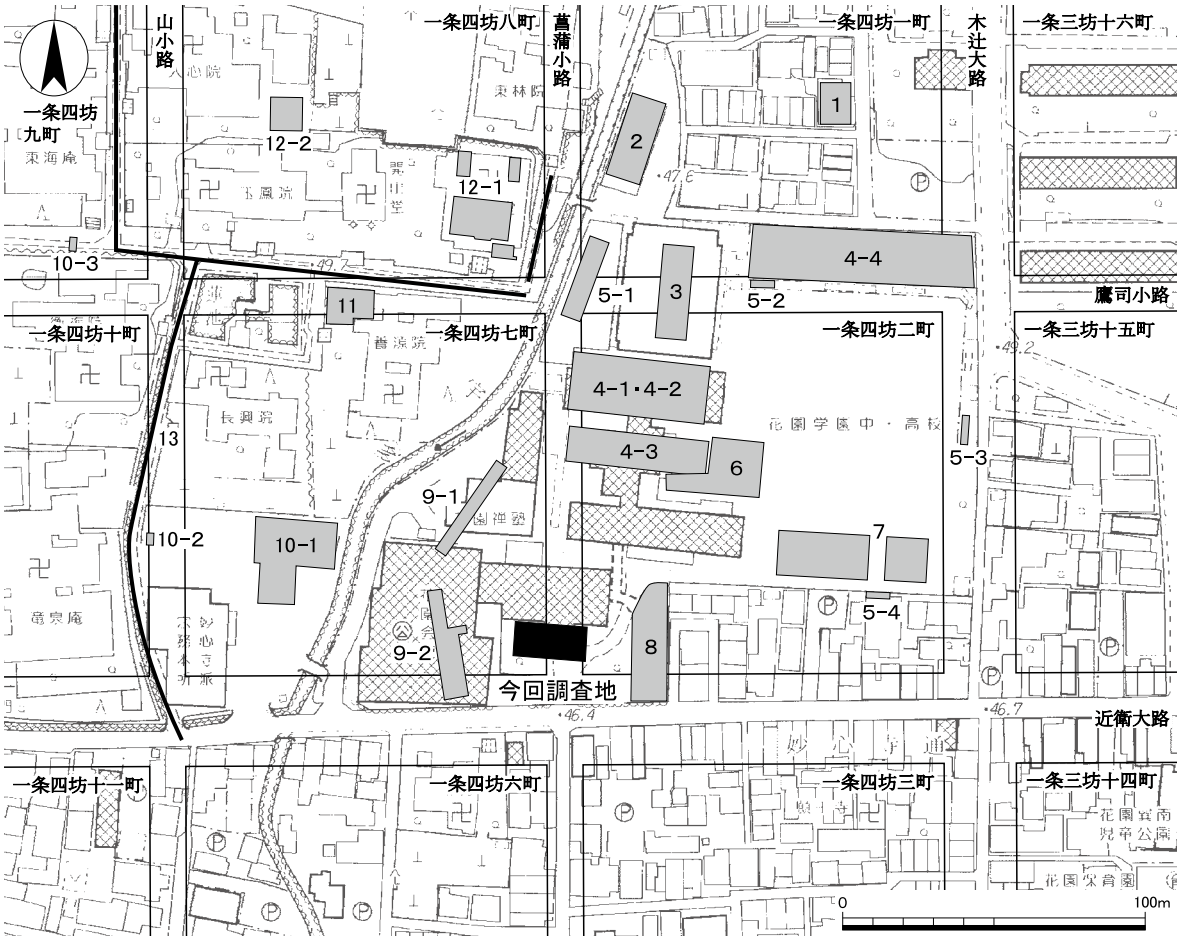


図７　周辺調査位置図（１：2,500）

一町中部の立会調査（１）は、1992年９月に実施され、平安時代末期の柱穴が検出された[5)]。

一町南西部の発掘調査（２）は、1981年７月に花園高等学校校舎増築に伴い実施された。宇多川の旧流路、時期不明の溝・土坑・柱穴などが検出された[6)]。

一町・二町西部及び鷹司小路の発掘調査（３）は、1988年５～６月に体育館改修に伴い実施された。調査面積は約300㎡で、鎌倉時代の溝・集石遺構・土坑・柱穴、江戸時代後期の土坑・溝などが検出された[7)]。

一町・二町の発掘調査（４）は、1992年７～８月に校舎改修及び新築に伴い実施された。二町では室町時代に埋没した宇多川の旧流路、平安時代後期から鎌倉時代前期の溝・土坑・柱穴、江戸時代の流路・土坑などが検出された。弥生時代の小土坑からは、後期の手焙形土器が出土したことが注目される[8)]。

一町・二町西部及び鷹司小路・木辻大路での詳細分布調査（５）は、2014年７月に実施され、時期不明の遺物包含層が検出された[9)]。

二町中央部の発掘調査（６）は、2020年２月に校舎増築に伴い実施された。近世の多数の墓や柱穴・土坑・井戸・溝などが検出されている[10)]。

二町東部の詳細分布調査（７）は、2019年４月に校舎増築に伴い実施された。現地表下0.5ｍで明治時代の整地層が遺存している[11)]。

二町南西部の立会調査（８）は、1997年５～７月に校舎新築に伴い実施された。鎌倉時代の溝、室町時代の土坑、江戸時代の柱穴などを検出した。鎌倉時代の溝は南北30ｍ以上に及ぶ。妙心寺の創建期にあたる遺構とみられる[12)]。

七町南東部の発掘調査（９）は、1992年７～８月に花園会館建設に伴い実施された。中世とみられる柱穴群・柵、時期不明の土坑、宇多川の旧流路などが検出されている[13)]。

七町南西部の発掘調査（10）は、宇多川東側の妙心寺宗務本所前駐車場で2013年７～10月に防災貯水槽設置に伴い実施された。平安時代前・中期の池、鎌倉時代から室町時代の柱穴・土坑・溝、江戸時代の溝・土取り土坑・墓群が検出されている[14)]。

七町北部の鷹司小路での詳細分布調査（11）は、2014年７月に実施された。時期不明の土坑と整地層が検出されている[15)]。

八町の発掘調査（12）は、2002年11月～2003年１月に涅槃堂の再建に伴い実施された。江戸時代前期の柱穴・溝、江戸時代中期から後期の柱穴・土坑などが検出されている[16)]。

八町～十町・山小路での広域立会調査（13）は、1979年に花園地区の公共下水道工事に伴い実施された。平安時代から室町時代、江戸時代に属する土坑・溝・井戸・池・柱穴などの遺構が確認されている[17)]。

以上のように、広範囲にわたって平安時代から江戸時代の遺構が検出されているのがわかる。

註

１）『京都市遺跡地図』 京都市文化市民局文化財保護課　2020年

２） 荻須純道『正法山六祖伝訓註』 思文閣出版　1979年

３） 竹貫元勝「妙心寺」『妙心寺』開山無相大師六五〇年遠諱記念　読売新聞社　2009年

４） 平井俊行『近世妙心寺建築の研究』 思文閣出版　2013年

５）『京都市内遺跡立会調査概報　平成４年度』 京都市文化観光局　1993年

６）『妙心寺境内地の調査』 花園大学考古学研究室　1985年

７）『花園大学構内調査報告Ⅲ』 花園大学考古学研究室　1989年

８）『平安京右京二条三坊八町－花園大学構内調査報告Ⅶ』 花園大学考古学研究室　2010年

９）『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成26年度』 京都市文化市民局　2015年

10） 未報告　2020年調査　学校法人花園学園

11）『京都市内遺跡詳細分布調査報告　令和元年度』 京都市文化市民局　2020年

12）『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』 京都市文化市民局　1998年

13）『花園大学構内調査報告Ⅳ』 花園大学考古学研究室　1993年

14）『史跡妙心寺境内・平安京跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2014－11　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2015年

15）『京都市内遺跡詳細分布調査報告　平成26年度』 京都市文化市民局　2015年

16）『史跡妙心寺境内・平安京右京一条四坊八町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002－16 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

17）『京都嵯峨野の遺跡－広域立会調査による遺跡調査報告－』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1997年

３．遺　　構

（１）基本層序（図８）

調査地の地表面は標高約47.1ｍである。西壁では、厚さ約0.7ｍの現代盛土層下に明治時代以降の厚さ約0.2ｍの整地層がある。その下には地山である明黄褐色砂泥が存在し、この上面で平安時代から江戸時代の柱穴・柱列・土坑・溝・井戸などの遺構が成立する。

（２）遺構の概要

調査は１面で実施したが、遺構の重複関係や出土遺物から、平安時代から江戸時代までの４時期に分けられる。検出した遺構総数は164基である。

平安時代の遺構は、調査区中央部で南北方向の溝を検出した。他には南東部に土坑があるのみでこの時期の遺構分布密度は低い。

鎌倉時代の遺構は、調査区東端と中央付近に柱穴・土坑などが部分的に集中して分布する。

室町時代の遺構は、調査区全域に柱穴・土坑・溝などがまばらに分布する。東部には複数の東西方向の溝がみられ、西部には少数であるが柱穴もある。鎌倉時代に比較して遺構数が増加する傾向にある。

江戸時代の遺構は、調査区全体で柱列・柱穴・土坑・溝・井戸などの遺構を検出した。室町時代に比較して遺構数が急激に増加する。東部には南北方向の石組溝、西部には南北方向の溝がある。漆喰製土坑には方形のものと円形のものがある。中央部の大型土坑は粘土採掘穴とみられる。井戸は東部と西部で検出した。

（３）平安時代の遺構（図９、図版１）

土坑１　調査区南東部で検出したほぼ円形の土坑である。径0.5ｍ、深さ約0.2ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。

溝140（図10、図版１）　調査区中部で検出した南北方向の溝である。南北を後世の遺構により

表１　遺構概要表

時　　代	遺　　構	備　　考
平安時代	土坑１、溝140	溝140は菖蒲小路西側溝
鎌倉時代	柱穴114、土坑３・60・64・166	
室町時代	柱穴88・96・151、土坑52・54・56・59・66・143、溝２・134	
江戸時代	土坑49・104・106・110・112・118・128・130・149、井戸131・142、溝13・57・78・102・107	塔頭光國院内

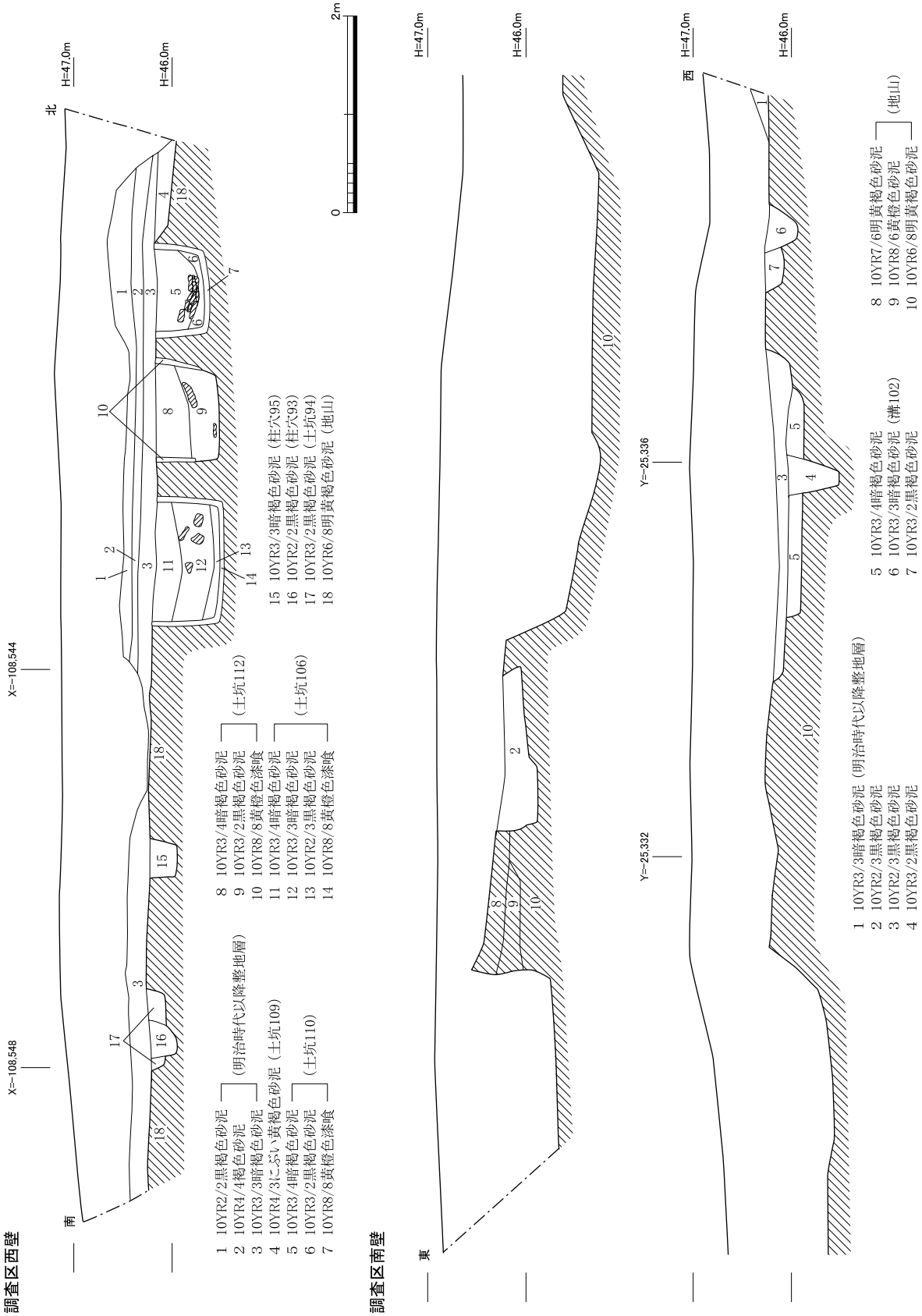


図８　調査区西壁・南壁断面図（１：60）

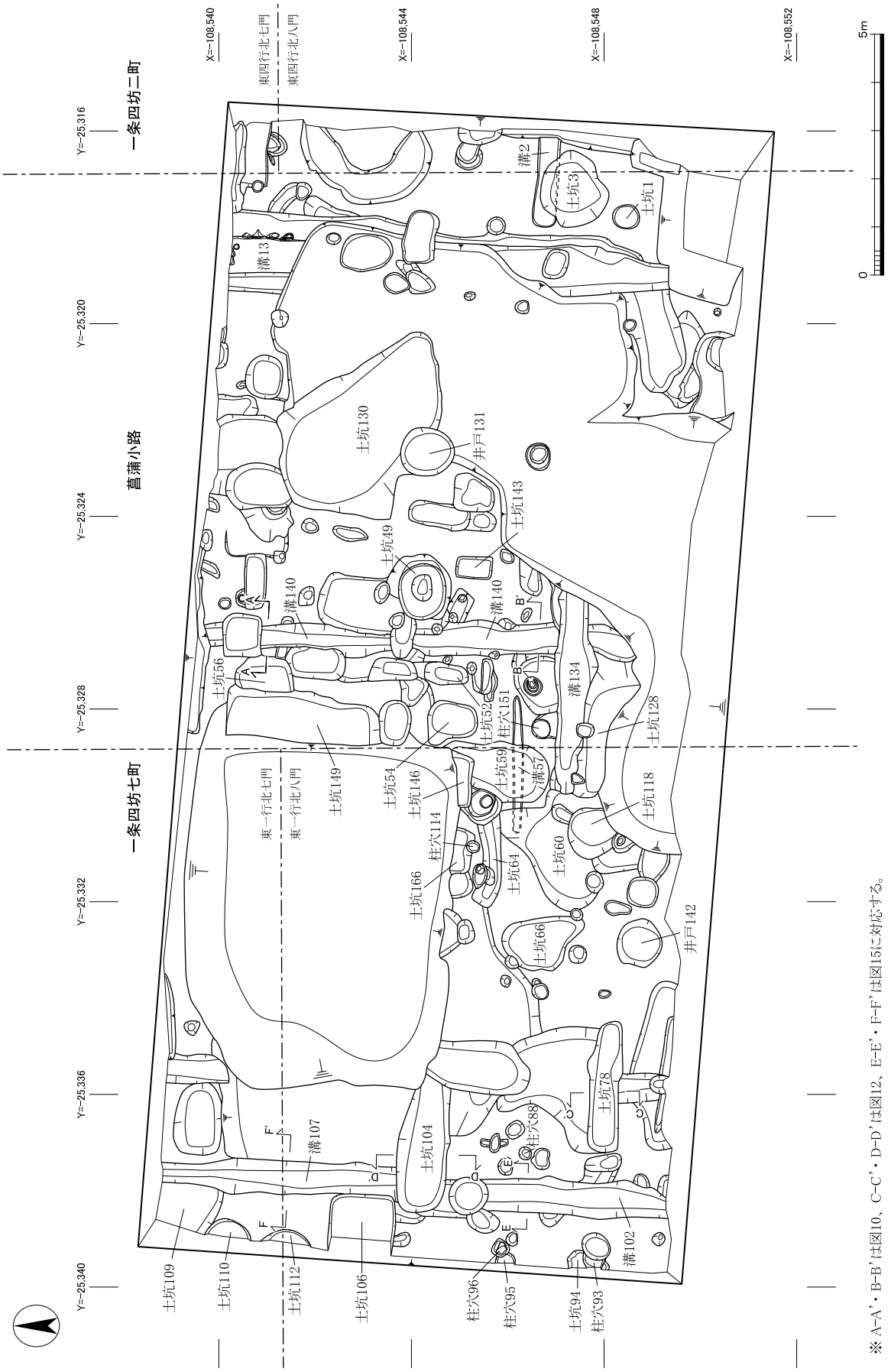


図９　遺構平面図（１：120）

壊される。幅0.5～0.7ｍ、深さ約0.3ｍ、南北９ｍ以上。断面形はＵ字状を呈する。埋土はよく締まり、黒褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。菖蒲小路の西側溝とみられる。

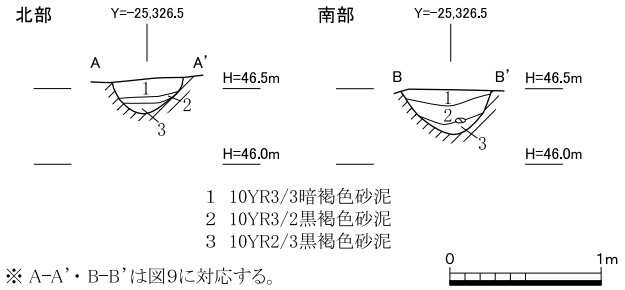


図10　溝140断面図（１：50）

（４）鎌倉時代の遺構（図９）

柱穴95　調査区西端で検出した柱穴である。径約0.4ｍ、深さ約0.3ｍ。西半部は調査区外となる。北東部は柱穴96に壊される。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。建物を復元するには至らない。

柱穴114　調査区中部で検出した柱穴である。径約0.3ｍ、深さ約0.2ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。建物を復元するには至らない。

土坑３　調査区東部で検出した土坑である。東西約1.6ｍ、南北1.4ｍ、深さ約0.4ｍの不整円形を呈する。北部を溝２に壊される。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦が出土した。廃棄土坑とみられる。

土坑60　調査区中部で検出した土坑である。東西約2.5ｍ、南北2.2ｍ以上、深さ約0.4ｍ、南半を後世の遺構に壊される。埋土はにぶい黄褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・瓦が出土した。

土坑64　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.8ｍ、南北約0.4ｍ、深さ約0.1ｍ。東部を後世の遺構に壊される。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・瓦が出土した。

土坑166　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.0ｍ、南北0.4ｍ以上、深さ約0.4ｍ、北半を既存建物の基礎により壊される。埋土はにぶい黒褐色砂泥を主体とする。土師器・須恵器・瓦が出土した。

（５）室町時代の遺構（図９）

柱穴88　調査区西部で検出した柱穴である。径約0.3ｍ、深さ約0.1ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。建物を復元するには至らない。

柱穴96（図11）　調査区西部で検出した柱穴である。径約0.4ｍ、深さ約0.2ｍ。底部付近に長辺約0.2ｍの石を据え付ける。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。周辺に同様の柱穴が見当たらないので建物を復元するには至らないが、西側に展開する建物の一部と考えられる。

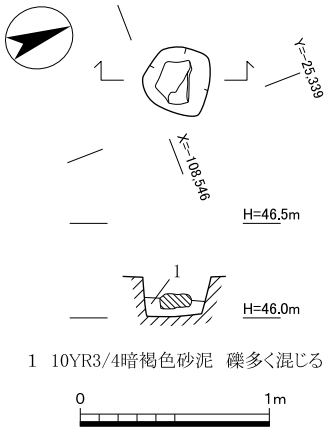


図11　柱穴96実測図（１：40）

柱穴151　調査区中部で検出した柱穴である。直径約0.4ｍ、

深さ約0.2ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器が出土した。建物を復元するには至らない。

土坑52　調査区中部で検出した土坑である。東西約0.5ｍ、南北約0.9ｍ、深さ約0.2ｍの南北方向に長い楕円形を呈する。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦が出土した。

土坑54　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.0ｍ、南北約1.1ｍ、深さ約0.2ｍの不整形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器・施釉陶器が出土した。

土坑56　調査区中部で検出した土坑である。東西0.7ｍ以上、南北約1.2ｍ、深さ約0.3ｍ。西部を既存建物の基礎により壊される。埋土は褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・瓦類が出土した。

土坑59　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.2ｍ、南北2.3ｍ以上、深さ約0.2ｍ。北部を土坑146により壊される。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器が出土した。

土坑66　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.1ｍ、南北約1.8ｍ、深さ約0.2ｍの不整形を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器が出土した。

土坑143　調査区中部で検出した土坑である。東西約0.5ｍ、南北約0.7ｍ、深さ約0.1ｍの長方形を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器が出土した。

溝２　調査区東部で検出した東西方向の溝状遺構である。東側は調査区外となる。幅約0.5ｍ、深さ約0.2ｍ、東西1.9ｍ以上。断面形はＵ字状を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器が出土した。東西方向の塀などの区画施設に伴う溝の可能性がある。

溝134　調査区中部で検出した東西方向の溝である。東側と南肩を後世の遺構により壊される。幅約0.9ｍ、深さ約0.5ｍ、東西4.1ｍ以上。断面形はＵ字状を呈する。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・施釉陶器が出土した。東西方向の塀などの区画施設に伴う溝の可能性がある。

（６）江戸時代の遺構（図９）

柱穴93　調査区西端で検出した柱穴である。径約0.3ｍ、深さ約0.3ｍ。西半部は調査区外となる。東部は他の柱穴に壊される。埋土は黒色砂泥を主体とする。土師器・施釉陶器が出土した。建物を復元するには至らない。

土坑49　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.2ｍ、南北約1.1ｍ、深さ約0.6ｍの楕円形を呈する。中央部に浅い窪みがある。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・施釉陶器・染付磁器・瓦が出土した。

土坑78（図12）　調査区西部で検出した土坑である。東西約2.8ｍ、南北約0.7ｍ、深さ約0.6ｍ。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。土師器・染付磁器・瓦が出土した。

土坑104（図12）　調査区西部で検出した土坑である。東西2.8ｍ以上、南北約1.1ｍ、深さ約0.4ｍ。東部を既存建物の基礎により壊される。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・施釉陶器・

染付磁器・瓦が出土した。

土坑106　調査区西端で検出した内面に漆喰が施された土坑である。掘形は東西1.2ｍ以上、南北約1.4ｍ、深さ約0.8ｍの方形を呈する。西半部は調査区外に続く。漆喰層の厚さは約0.06～0.08ｍ。埋土は暗褐色砂泥を主体とし、漆喰片・割れ石を多く含む。施釉陶器・染付磁器・瓦が出土した。貯水槽とみられる。

土坑109　調査区西端で検出した土坑である。東西1.7ｍ以上、南北1.3ｍ以上、深さ約0.6ｍ。埋土は黒色砂泥を主体とし、炭が多く混じる。施釉陶器・瓦が出土した。

土坑110　調査区西端で検出した内面に漆喰が施された土坑である。東西0.4ｍ以上、南北約1.1ｍ、深さ約0.5ｍ。西半部は調査区外に続き、円形を呈するとみられる。漆喰層の厚さは約0.06～0.08ｍ。埋土は暗褐色砂泥を主体とし、瓦を多量に含む。平面形は異なるが土坑106と同様に貯水槽とみられる。

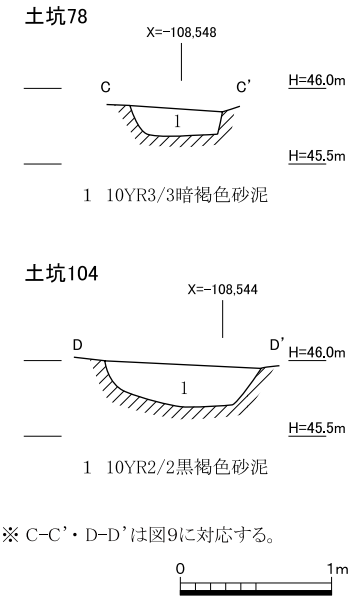


図12　土坑78・104断面図（１：50）

土坑112　調査区西端で検出した内面に漆喰が施された土坑である。東西0.4ｍ以上、南北約1.0ｍ、深さ約0.6ｍ。西半部は調査区外に続き、円形を呈するとみられる。漆喰層の厚さは約0.06ｍ。壁面の漆喰は底部までは続かず、底部上方約0.2ｍの位置で止まる。埋土は暗褐色砂泥を主体とし、漆喰片を含む。土師器・施釉陶器・染付磁器・瓦が出土した。排水施設の可能性がある。

土坑118　調査区中部で検出した土坑である。東西約1.1ｍ、南北0.9ｍ以上、深さ約0.3ｍ。南部を攪乱により壊される。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・土師質土器・瓦が出土した。

土坑128　調査区中部で検出した土坑である。東西3.1ｍ以上、南北0.6ｍ以上、深さ約0.6ｍ。南部を攪乱により壊される。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・瓦が出土した。底部は礫混じり層となるため、土取り穴の可能性がある。

土坑130　調査区東部で検出した大型の土坑である。東西約3.2ｍ、南北約3.9ｍ、深さ約0.8ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・輸入磁器・瓦類が出土した。壁は垂直に落ち、底部は礫混じり層となるため、土取り穴の可能性がある。

土坑149　調査区中部で検出した大型の土坑である。東西1.1ｍ以上、南北約3.3ｍ、深さ約0.8ｍ。西部を既存建物の基礎により壊される。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦類が出土した。壁は垂直に落ち、底部は礫混じり層となるため、土取り穴の可能性がある。

井戸131（図13、図版２）　調査区中部で検出した井戸である。掘形は径約1.1ｍ、深さ約2.3ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。掘形径が狭く壁の地山層がよく締まっていることから、素掘りの井戸とみられる。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・軟質施釉陶器・磁器・染付磁器・輸入陶磁器などが出土した。

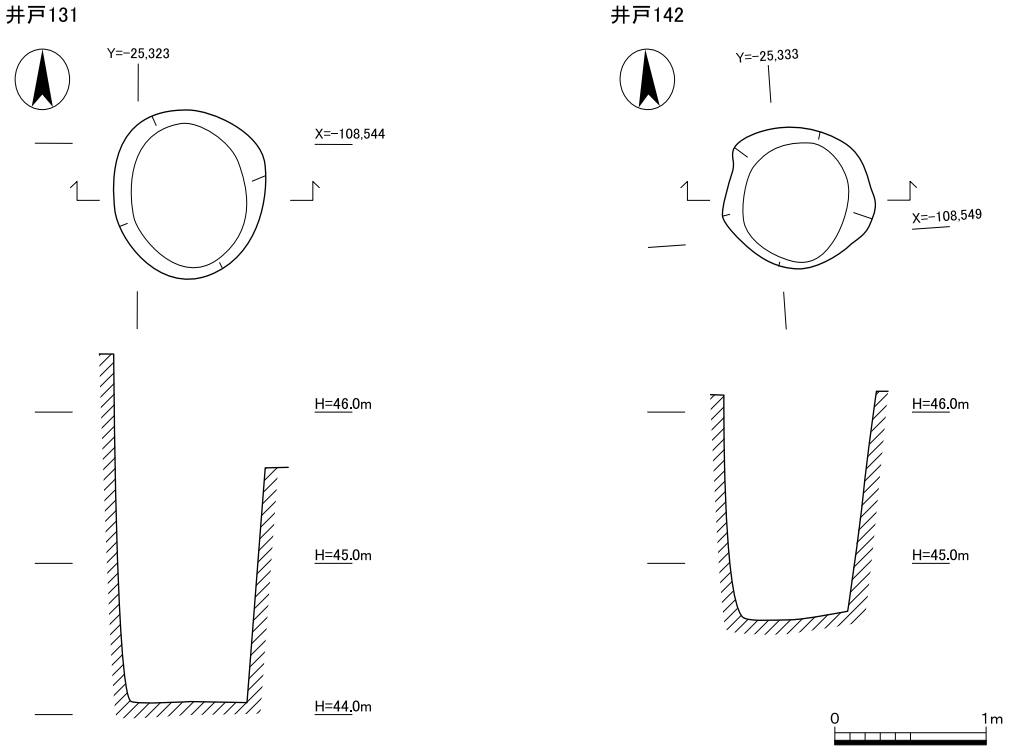
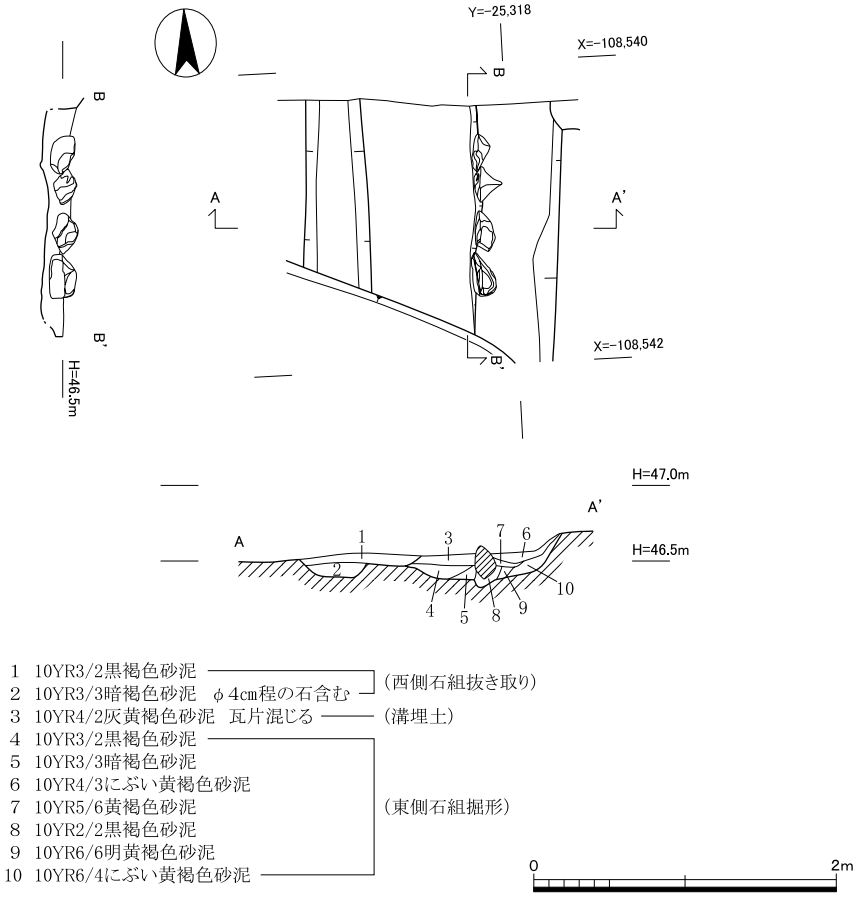


図13　井戸131・142実測図（1：50）



1　10YR3/2黒褐色砂泥
2　10YR3/3暗褐色砂泥　φ4cm程の石含む　（西側石組抜き取り）
3　10YR4/2灰黄褐色砂泥　瓦片混じる　（溝埋土）
4　10YR3/2黒褐色砂泥
5　10YR3/3暗褐色砂泥
6　10YR4/3にぶい黄褐色砂泥
7　10YR5/6黄褐色砂泥　（東側石組掘形）
8　10YR2/2黒褐色砂泥
9　10YR6/6明黄褐色砂泥
10　10YR6/4にぶい黄褐色砂泥

図14　溝13実測図（1：50）

井戸142（図13、図版２）　調査区西部で検出した井戸である。掘形は径約1.0ｍ、深さ約1.6ｍ。埋土は黒褐色砂泥を主体とする。掘形径が狭く壁の地山層がよく締まっていることから、素掘りの井戸とみられる。埋土内からは瓦類が多量に出土した。他には施釉陶器天目椀が出土した。

溝13（図14、図版２）　調査区東部で検出した南北方向の石組溝である。東肩の一部を除いて攪乱により壊される。幅約1.7ｍ、深さ約0.4ｍ、南北8.9ｍ以上。東側の石組１段４石が残存する。石は長辺が0.3ｍ前後の大きさである。西側に南北方向の小溝があり、西側石組の抜き取り跡と推測され、幅0.8ｍ程度の溝に復元できる。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・瓦などが出土した。南北方向の塀などの区画施設に伴う溝の可能性がある。

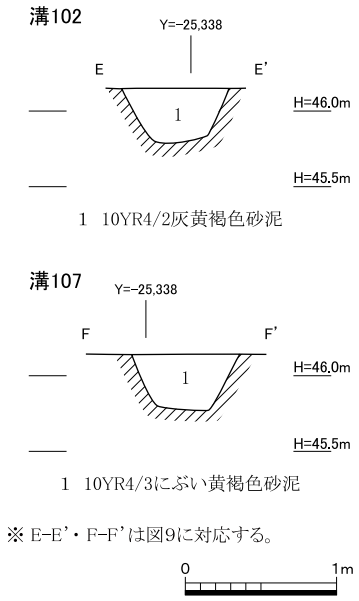


図15　溝102・107断面図（１：50）

溝57　調査区中部で検出した小規模な東西方向の溝である。幅約0.1ｍ、深さ約0.1ｍ、東西2.9ｍ。断面形は皿状を呈する。埋土は暗褐色砂泥を主体とする。土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・輸入陶磁器・瓦・金属製品が出土した。

溝102（図15）　調査区西部で検出した南北方向の溝である。幅約0.8ｍ、深さ約0.4ｍ、東西5.9ｍ以上。南は調査区外にのびる。断面形は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・瓦などが出土した。北側の溝107に連続する可能性があり、南北方向の塀などの区画施設に伴う溝とみられる。

溝107（図15）　調査区西部で検出した南北方向の溝である。幅約0.7ｍ、深さ約0.4ｍ、南北4.9ｍ以上。北は攪乱により壊される。断面形は逆台形を呈する。埋土はにぶい黄褐色砂泥を主体とする。土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・瓦などが出土した。南側の溝102に連続する可能性があり、南北方向の塀などの区画施設に伴う溝とみられる。

４．遺　　物

（１）遺物の概要

遺物は、整理コンテナに23箱出土した。時期別にみると、江戸時代のものが多く、次いで鎌倉時代から室町時代のものがあり、平安時代のものは少ない。種類別では、土器・陶磁器類に比べて瓦類が多くを占める。

平安時代の遺物は、土坑・溝などから、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器・瓦類などが出土した。瓦類には、後期の軒丸瓦・軒平瓦がある。

鎌倉時代の遺物は、柱穴・土坑などから、土師器・瓦器・焼締陶器・輸入陶磁器・瓦類などが出土した。

室町時代の遺物は、柱穴・土坑・溝などから、土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・輸入陶磁器・瓦類などが出土した。

江戸時代の遺物は、柱穴・土坑・溝・井戸などから、土師器・土師質土器・瓦質土器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・土製品・瓦類などが出土した。

その他の遺物には、金属製品・石製品・ガラス製品・骨などがある。金属製品には、吊り金具・簪・銭貨（寛永通寶）がある。

遺物は種類ごとに分け、時代の古い順から記述する。なお、出土土器の時期は、平尾政幸編年[1)]に準拠した。

表２　遺物概要表

時　代	内　　容	コンテナ箱数	Ａランク点数	Ｂランク箱数	Ｃランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、軒丸瓦、軒平瓦		土師器２点、軒丸瓦２点、軒平瓦２点		
鎌倉時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類				
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、石製品		土師器１点		
江戸時代	土師器、土師質土器、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、染付、土製品、瓦類、石製品、金属製品、ガラス製品、骨		施釉陶器３点、軟質施釉陶器１点、白磁１点、染付３点、瓦類23点、金属製品２点、銭貨２点		
合　計		27箱	42点（４箱）	０箱	23箱

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Ａランクの遺物を抽出したため、出土時より４箱多くなっている。

（２）土器類（図16）

溝140出土土器（１・２）　土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。

１・２は土師器皿Ｎの口縁部小片である。口縁部は２段ナデを施し、端部は外反する。胎土は密で、φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・雲母を含み、にぶい黄褐色から浅黄橙色。焼成は良好。口縁部の小破片であるが、形態の特徴から４段階に属する。

土坑143出土土器（３）　土師器・須恵器が出土した。

３は土師器皿Ｓである。口径11.8㎝、残存高2.1㎝。体部が緩やかに外上方に立ち上がる。口縁部は丸く収め内側にわずかに面をもつ。口縁部内外面はヨコナデ、内面はナデを施し、外面はオサエ。胎土は密で、φ1.0㎜以下の長石・石英・チャート・赤色粒子を含み、橙色。焼成は良好。10～11段階に属する。

井戸142出土土器（４）　施釉陶器が出土した。

４は瀬戸・美濃系の天目椀である。口径11.6㎝、残存高6.5㎝、底部を欠損する。体部は外上方に立ち上がり、口縁部付近で内湾し、端部は外反する。内外面ともに黒色の天目釉を施す。胎土は密で、φ1.5㎜以下の石英・チャートを含み、灰白色。焼成は良好。17世紀。

井戸131出土土器（５～８）　土師器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・軟質施釉陶器・磁器・染付磁器・輸入陶磁器などが出土した。

５は軟質施釉陶器皿である。口径7.4㎝、器高1.4㎝。わずかに内湾する底部から、体部が内湾気味にのび、口縁端部は丸く収める。内面底部には圏線を巡らす。内外面はロクロナデ、内面には明赤褐色の釉を施し、底部には鉄釉絵を施す。底部外面は糸切痕が残る。胎土は密で、φ0.5㎜以下の長石・石英を含み、橙色。焼成は良好。18世紀。

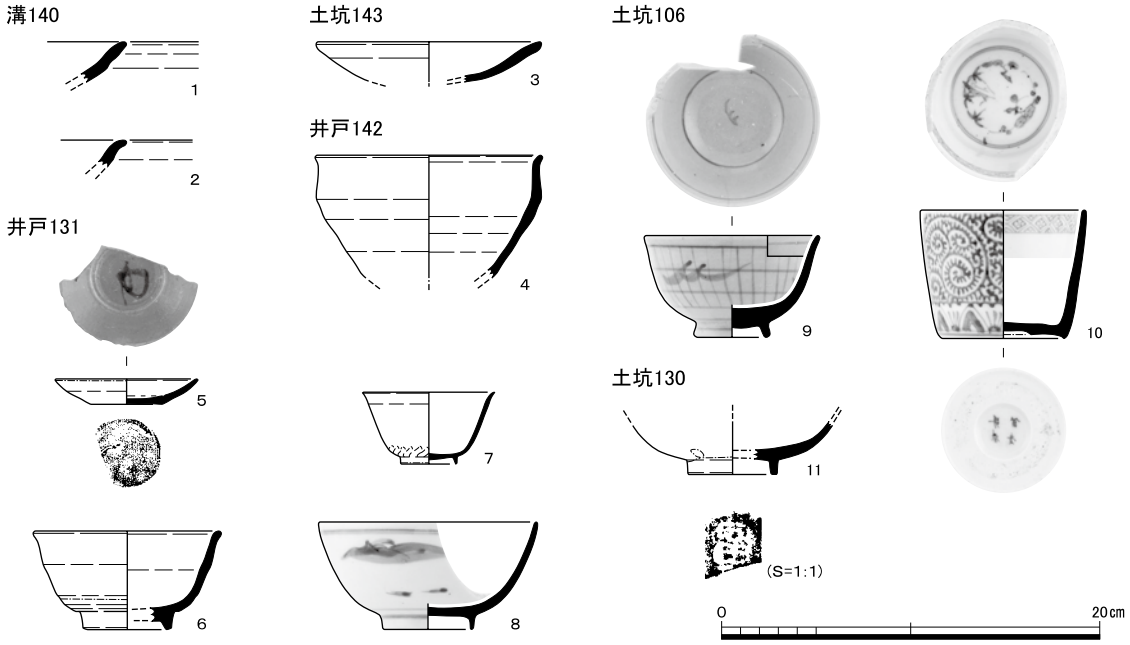


図16　土器実測図（１：４）

６は瀬戸・美濃系の鉄釉杯である。口径9.8㎝、高台径4.2㎝、器高5.3㎝。高台のある底部から体部が緩やかに外反して立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸く収める。高台部周辺以外に暗褐色の鉄釉を施す。体部内外面はロクロナデ、体部下方は回転ケズリ。高台は削り出し。胎土は密で、φ1.5㎜以下の長石・石英・チャートを含み、灰白色。焼成は良好。18世紀。

７は肥前系白磁杯である。口径7.0㎝、高台径3.0㎝、器高3.8㎝。体部は薄く、高台のある底部から外上方に立ち上がり、口縁部で緩やかに外反する。内外面ともに施釉し、高台部先端を釉ハギする。胎土は灰白色。焼成は良好。18世紀前半。

８は肥前系染付磁器椀である。口径11.5㎝、高台径4.6㎝、器高5.7㎝。高台のある底部から体部が緩やかに内湾して立ち上がる。口縁端部は丸く収める。高台部先端を釉ハギする。体部外面に呉須で簡略な山水文を描く。胎土は灰白色。焼成は良好。18世紀前半。

土坑106出土土器（９・10） 施釉陶器・染付磁器が出土した。

９・10は染付磁器である。９は波佐見系の小振りな椀である。口径9.1㎝、高台径3.8㎝、器高5.4㎝。高台のある底部から体部が緩やかに外反して立ち上がる。口縁部はやや外反し、端部は丸く収める。高台部先端にはハナレ砂が付着する。体部外面に呉須で簡略な格子文と波文を描く。内面の口縁部付近と底部に圏線を描き、底部中央に波文を施す。胎土は灰白色。焼成は良好。18世紀後半。10は肥前系の猪口である。口径8.6㎝、高台径6.4㎝、器高6.8㎝。底部から体部が上方に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。体部外面に呉須で蛸唐草文、内面口縁部に四方襷文、底部に圏線の中に松竹梅文を描く。高台内に崩れた「冨貴長春」を描く。蛇の目釉ハギ凹型高台。胎土は灰白色。焼成は良好。18世紀後半。

土坑130出土土器（11） 土師器・焼締陶器・施釉陶器・染付磁器・輸入磁器などが出土した。

11は施釉陶器で、京焼風肥前の椀である。高台のある底部から体部は緩やかに内湾して立ち上がる。体部外面と内面に浅黄色の釉を施す。底部内面に簡略な山水文を描く。高台は削り出し、高台内に「冨」の刻印がある。18世紀前半。

（３）瓦類（図17～20、図版３）

瓦類には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・道具瓦・塼がある。柱穴・土坑・溝・井戸などから出土している。平安時代から江戸時代の瓦類が出土しており、江戸時代のものが最も多い。

平安時代（図17）

軒丸瓦（瓦１・２） 瓦１は単弁蓮華文軒丸瓦である。凸形中房で蓮子数は不明。周りに蕊帯が巡る。蓮弁の先端は尖り、子葉あり。外区は狭く珠文は配されない。瓦当部外周と裏面はナデ。胎土は長石・石英・チャートを含み、浅黄橙色、硬質。土坑56から出土。後期。

瓦２は三巴文軒丸瓦である。巴は右巻きで尾が長い。珠文は配されない。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、粘土を付加して接合。調整は、瓦当上面はヨコナデを施す。丸瓦凸面には縄目、丸瓦凹面には布目が残る。胎土は長石・石英・チャートを含み、灰色、やや軟質。土坑130から出土。後期。

軒平瓦（瓦３・４） いずれも剣頭文を垂直に配する。

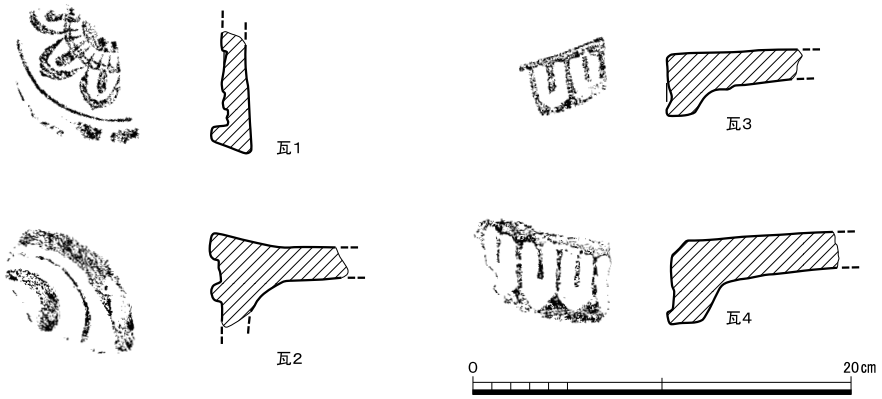


図17　瓦類拓影及び実測図１（１：４）

瓦３は瓦当面に布目が残る。曲線顎。瓦当部形成は折曲げ技法。瓦当部上端部はヨコ方向のケズリ。瓦当部凹面布目、端部ヨコケズリ。裏面オサエで曲げじわあり。胎土は長石・石英・チャートを含み、灰白色、やや軟質。土坑130から出土。後期。

瓦４は曲線顎。瓦当部形成は折曲げ技法。瓦当部上端部はヨコ方向のケズリ。瓦当部凹面布目、端部ヨコケズリ。側面上部に面取りを施す。裏面オサエで曲げじわあり。胎土は長石・石英・チャートを含み、灰色、硬質。土坑149から出土。後期。

江戸時代（図18～20）

軒丸瓦（瓦５～12）　瓦５～10・12は右巻き三巴文、瓦11は左巻き三巴文で、尾は互いに接しない。

瓦５は外区に珠文が密に配される。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。瓦当上面から丸瓦凸面はタテ方向のナデ。丸瓦凹面は糸切りのち布目。瓦当裏面はナデ、側面はヨコナデを施す。玉縁部はヨコナデ。丸瓦部玉縁寄りの頂部に径約1.0㎝の釘留のための穿孔がある。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色を呈する。焼成時に燻す。鉄線コビキＢタイプ。井戸142から出土。江戸時代初期。

瓦６～９は外区に珠文が15個配される。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。瓦当上面から丸瓦凸面はタテ方向のナデ。丸瓦凹面は糸切りのち布目。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色から暗灰色を呈する。焼成時に燻す。鉄線コビキＢタイプ。井戸142から出土。江戸時代初期。

瓦10は外区に珠文が粗く配される。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。瓦当上面から丸瓦凸面はタテ方向のナデ。丸瓦凹面は糸切りのち布目。瓦当裏面はナデ、側面はヨコナデを施す。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色を呈する。焼成時に燻す。鉄線コビキＢタイプ。瓦６～９より大型である。井戸142から出土。江戸時代初期。

瓦11・12は外区にやや大粒の珠文13個が粗く巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。瓦当上面から丸瓦凸面はタテ方向のナデ。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。瓦12は瓦当裏面の丸瓦接合部にカキヤブリを施す。瓦11の瓦当面にはキラ粉

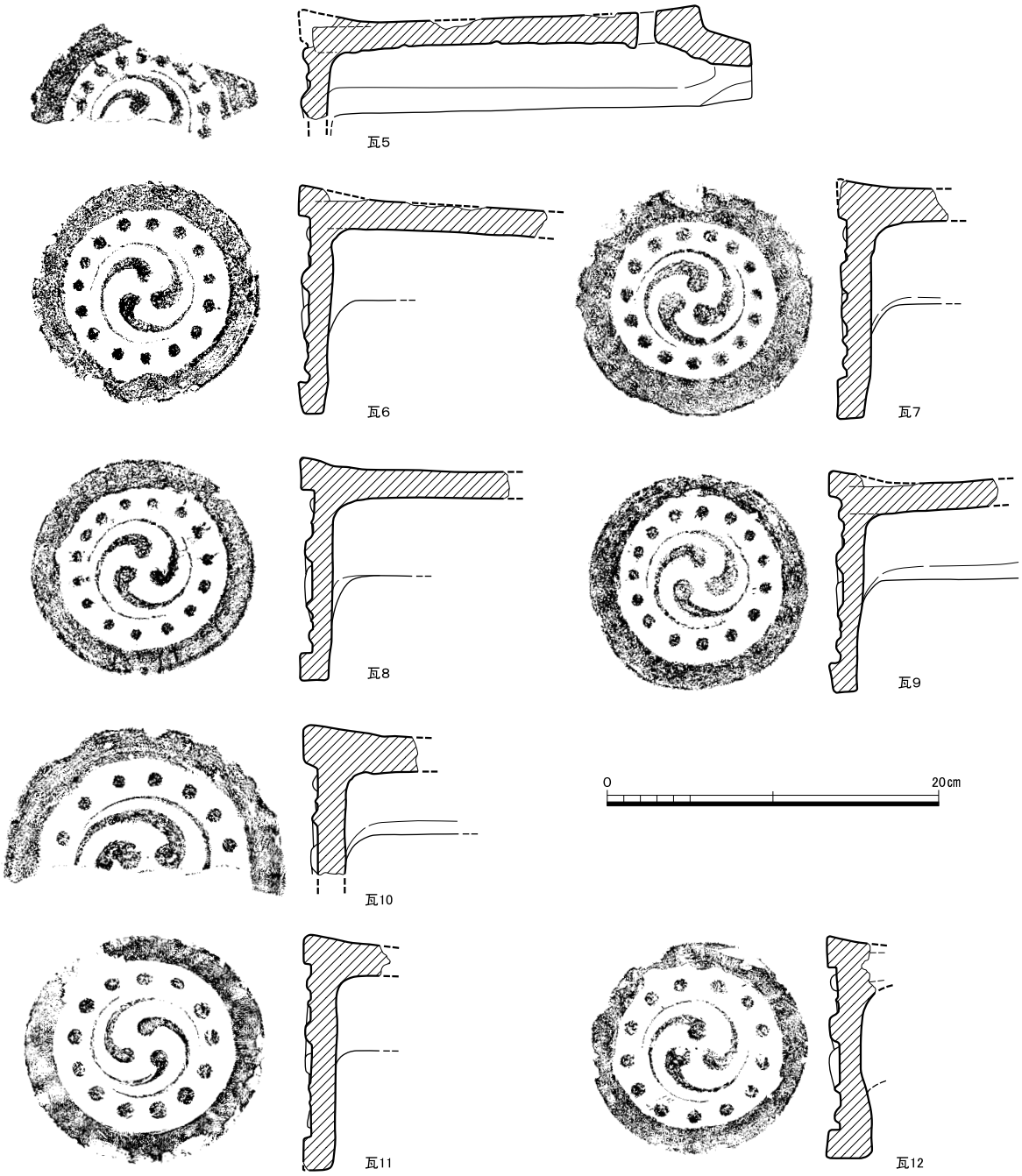


図18　瓦類拓影及び実測図２（１：４）

が付着する。ともに胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色を呈する。焼成時に燻す。瓦11は土坑130、瓦12は土坑106から出土。ともに江戸時代中期以降。

軒平瓦（瓦13～22）　いずれも簡略化した唐草文である。

瓦13～18は三つ葉の中心飾りから唐草が左右に２回反転する。瓦13～15は唐草が細く、先端の巻きが強い。対して瓦16～18は唐草が太く、先端の巻きが緩い。いずれも左右の周縁が広い。段顎。顎端面と顎裏面にヨコナデを施す。瓦16・18は瓦当部上端部にヨコ方向のケズリ。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色から暗灰色を呈する。焼成時に燻す。井戸142から出土。江戸時代初期。

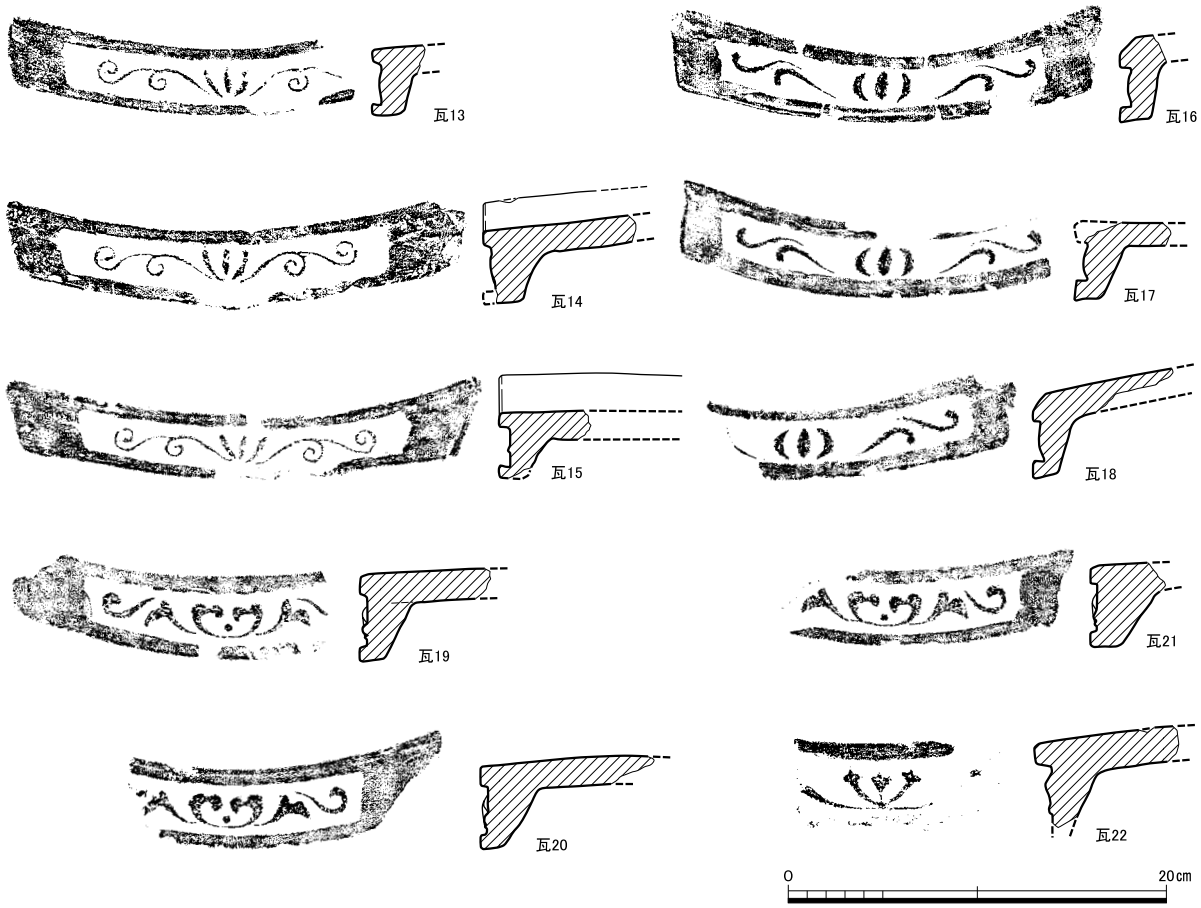


図19　瓦類拓影及び実測図３（１：４）

瓦19～21は中心に珠点を配する上向き二葉文の中心飾りから唐草が左右に２回反転する。左右の周縁が広い。段顎。瓦19・21は瓦当部上端部にヨコ方向のケズリ。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色から暗灰色を呈する。焼成時に燻す。井戸142から出土。江戸時代初期。妙心寺境内の発掘調査（図７－12）で同文瓦が出土している。

瓦22は中心飾り部分である。三つ葉の先端が三股に分かれる。段顎。瓦当部上端部はヨコ方向のケズリ。顎裏面にヨコナデを施す。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、暗灰色を呈する。焼成時に燻す。井戸142から出土。江戸時代初期。

飾り瓦（瓦23～26）　瓦23・24は九曜文である。中心に大型の丸形を配し、周囲に小型の丸型を８個配する。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。瓦当上面から丸瓦凸面はタテ方向のミガキ。丸瓦凹面は布目。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。瓦23の丸瓦両下端部を板状粘土でブリッジ状に繋いで補強する。瓦23の瓦当面にはキラ粉が付着する。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色から暗灰色を呈する。焼成時に燻す。ともに土坑106から出土。ともに江戸時代中期以降。

瓦25・26は巴が右巻きで尾が互いに接しない。珠文は配さない。瓦当部裏面上部に丸瓦を当て、少量の粘土を付加して接合。瓦当上面から丸瓦凸面はタテ方向のミガキ。瓦当側面はヨコナデ、瓦当裏面下端に円周状ナデを施す。瓦当部裏面接合部にカキヤブリが施されている。胎土は密で、焼

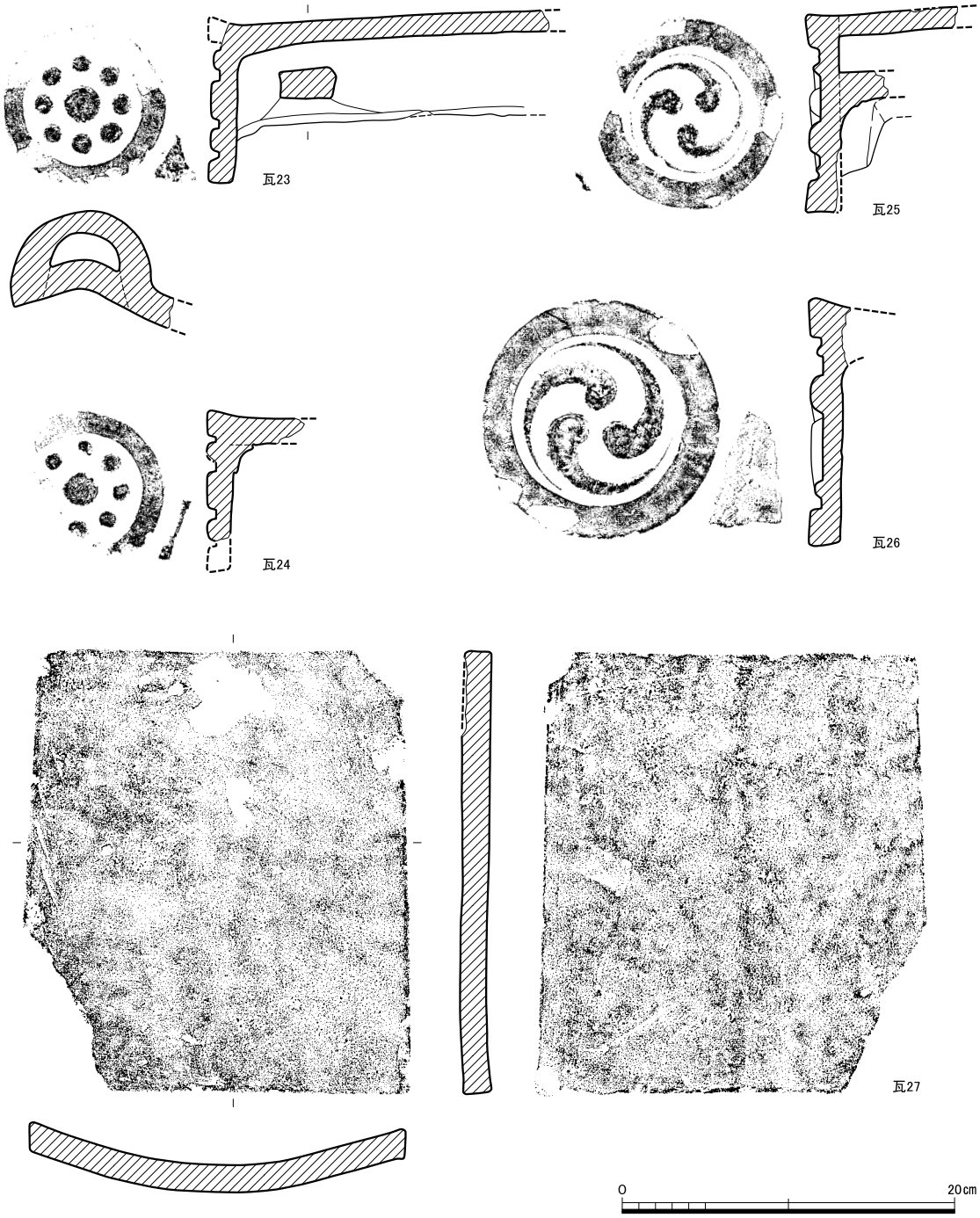


図20　瓦類拓影及び実測図４（１：４）

成は良好で焼き締まり、暗灰色を呈する。瓦26の瓦当面にはハナレ砂が付着する。焼成時に燻す。瓦25は土坑130、瓦26は土坑128から出土。ともに江戸時代中期以降。

平瓦（瓦27）　凹面凸面ともにナデで仕上げる。側面はタテ方向のケズリ。端面は横方向のナデ。胎土は密で、焼成は良好で焼き締まり、灰色を呈する。井戸142から出土。江戸時代初期。

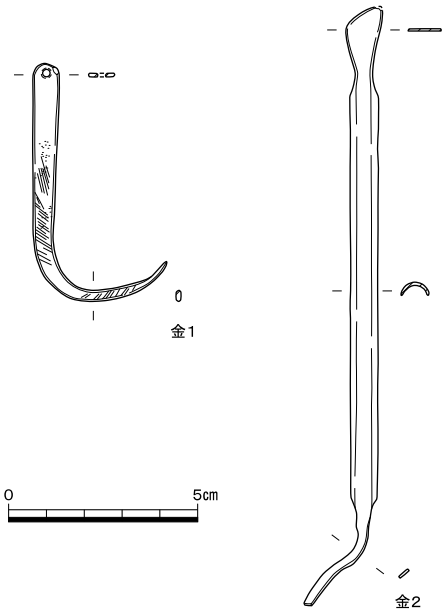


図21　金属製品実測図（１：２）

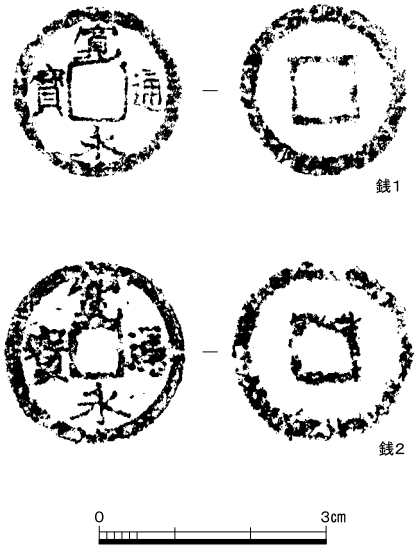


図22　銭貨拓影（１：１）

（４）金属製品（図21・22）

金属製品には、吊り金具と用途不明品、銭貨がある。

吊り金具（金１）　釣り針形を呈した板状の製品である。上部に径0.2㎝の円孔がある。鍍金がわずかに残る。屈曲部付近に数条の凹線が認められるが、施した模様か使用痕かは不明である。長さ6.3㎝、幅3.6㎝、厚さ0.2㎝、重量3.8ｇ。銅製。溝57から出土。江戸時代。

用途不明品（金２）　板状で体部をＵ字状に湾曲させた製品である。上部は平坦で、匙形を呈する。下部は細く加工される。長さ15.8㎝、幅1.0㎝、厚さ0.1㎝、重量8.5ｇ。銅製。土坑128から出土。江戸時代。

銭貨（銭１・２）　いずれも寛永通寶である。銭１は外径2.5㎝、厚さ0.1㎝、重量1.4g。古寛永。銭２は外径2.3㎝、厚さ0.09㎝、重量2.3g。新寛永。ともに土坑128から出土。

註

１）　平尾政幸「土師器再考」『洛史　研究紀要　第12号』　公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2019年

750年　840年　930年　1020年　1110年　1170年　1260年　1350年　1410年　1500年　1590年　1680年　1740年　1800年　1860年

1			2			3			4			5		6			7			8		9			10			11			12		13		14	
A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	A	B	A	B

５．まとめ（図23）

今回の調査地は、平安京右京一条四坊二・七町跡及び菖蒲小路跡にあたる。右京一条四坊とその周辺に方８町域を占める籍田があり、後に「花園離宮」と呼ばれた離宮や「池館」と呼ばれた源有仁の邸宅が営まれたとされる。周辺では、平安時代の遺構が検出されており、今回も当該期の遺構の検出が期待されていた。

妙心寺は、開創年代には諸説があるが、14世紀前半頃に花園上皇がこの地にあった離宮を禅寺に改めたものとされている。調査地には、元和6年（1620）に妙心寺の塔頭である光國院が建立され、その東隣には、寛永10年（1633）に麟祥院が創建されている。のちに光國院・麟祥院ともに、明治時代末期に妙心寺北門付近の現在位置に移転している。

以下、時代ごとに調査の成果を述べる。

１期　平安時代

菖蒲小路西側溝の推定位置で南北方向の溝140を検出した。埋土から11世紀の土師器が出土している。なお、今回の調査地の約220ｍ南側で1991年に実施された山陰線複線化工事に伴う調査[1)]では、平安時代前期の菖蒲小路東側溝が検出されている。今回の調査が菖蒲小路側溝の最も北側での発見地点となる。

なお、籍田・花園離宮・池館などに関連するとみられる遺構は検出できなかった。しかし、この時期の遺物は、溝140や後世の遺構に混入して土師器・灰釉陶器・緑釉陶器・軒丸瓦・軒平瓦・布目瓦などが出土している。

２期　鎌倉時代（妙心寺創建以前）

調査区中央付近に、柱穴・土坑などが部分的に集中しているが、その配置からは建物などとしてまとめることができなかった。

３期　室町時代（妙心寺期）

調査区全域に柱穴・土坑・溝などが分布する。鎌倉時代に比較して遺構数が増加する傾向にある。溝２・134など東西方向の溝がみられる。溝の傾きは平安京の造営方位と同様である。柱穴96は地下式礎石で、西側に展開する建物の一部と考えられる。

４期　江戸時代（妙心寺期）

江戸時代の遺構は、妙心寺塔頭に関連する遺構とみられる。今回の調査地は、万治元年（1658）の境内を描いた『妙心寺伽藍並びに塔頭総絵図[2)]』や安政６年（1859）の『正法山妙心禅寺塔頭総図[3)]』（図版４）などの描かれた下立売街道とそれに架かる橋との関係から、光國院とその東側の麟祥院付近にあたると考えられる。

妙心寺の塔頭である「光國院」は、元和６年（1620）に建立された。この寺院は美濃加納城主である松平忠隆が、父・忠政の菩提を弔うために、名古屋・総見寺の梁南禅棟に講じて創建した。当初は「慧照院」の北、もとの「麟祥院」の西に位置し、勅使の休憩所として使われていた。光國院は明治時代末に妙心寺北門東の現在位置（「盛徳院」の旧跡）に移転している。

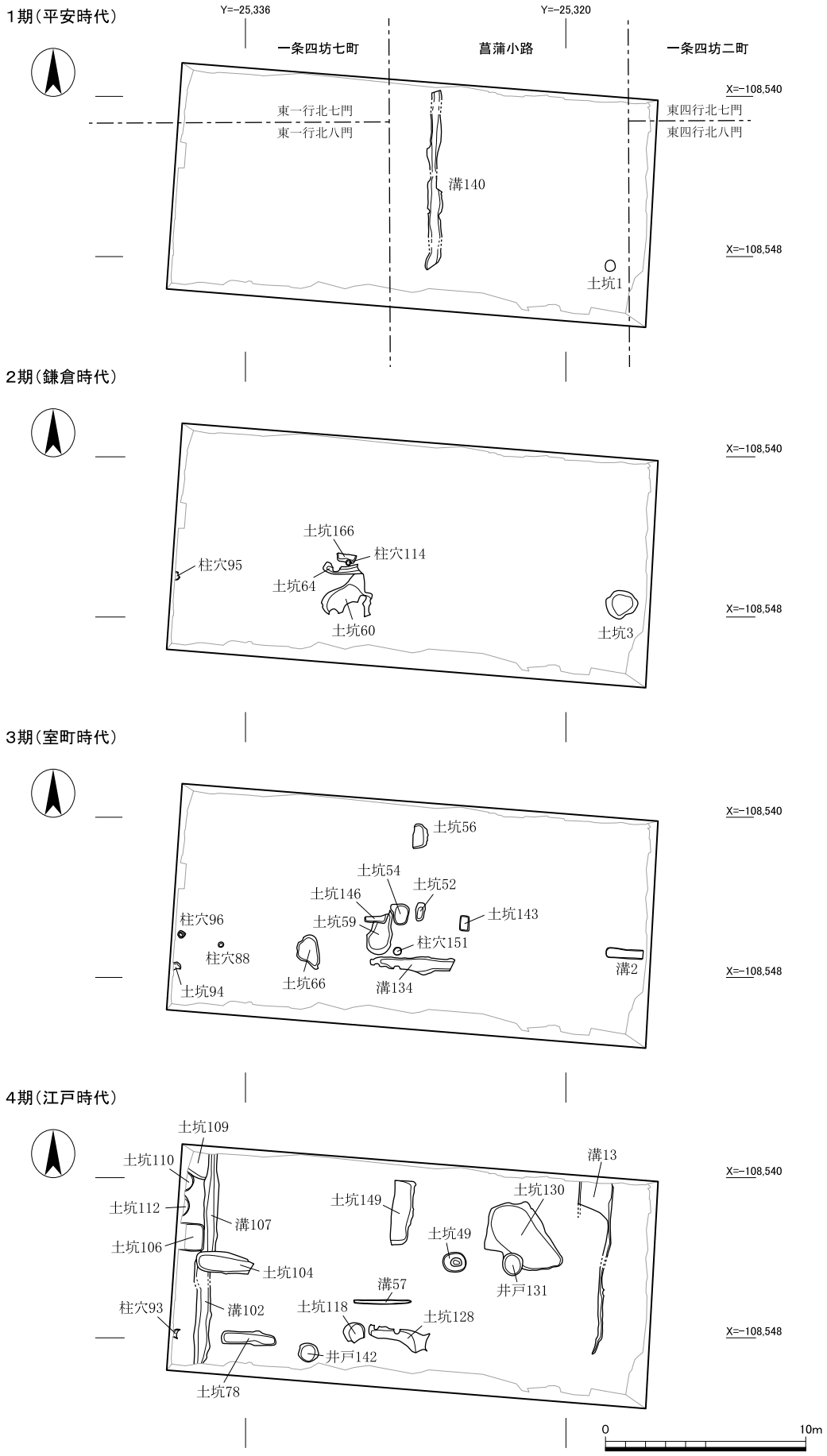


図23　遺構変遷図（1：300）

また、「麟祥院」は寛永10年（1633）創建である[4)]。木辻菖蒲小路に源頼信の造建した天神社があり、徳川家光はこの天神社を鎮守として乳母である春日局のために一院を創建した。この位置がもとの「光國院」の東隣である。麟祥院は明治30年に妙心寺北門南の現在位置（「盛徳院」の旧跡）に移転している。

絵図により菖蒲小路が光國院と麟祥院の境界として踏襲されているとみられることから、調査区の東部で検出した南北方向の石組溝13は、光國院と麟祥院の境界に伴う施設の可能性がある。

調査区西側に位置する漆喰製土坑は、貯水や排水の機能をもっており、井戸も近くにあることからこの付近に庫裏が存在した可能性が高い。

また、井戸142から多量に出土した瓦類は製作技法から江戸時代初期に比定される。井戸の位置から推測すれば、光國院の敷地内に位置するとみられ、創建時の所用瓦の可能性が高い。

宇多川西側の妙心寺伽藍は、北で西に２度10分ほど振れているが、今回検出した各時代の溝（溝13・102・107）は正方位の南北方向溝であることから、宇多川の東側にあたる今回の調査地では、平安京の地割が踏襲されているとみられる。

註

1）「平安宮・平安京右京一条三・四坊・二条二・三坊・三条一坊」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

２）『妙心寺伽藍並びに塔頭総絵図』万治元年（1658） 狩野理左衛門作　妙心寺蔵

３）『正法山妙心禅寺塔頭総図』安政６年（1859） 妙心寺蔵

４）川上孤山・荻須純道『増補　妙心寺史』 思文閣出版　1984年

図　　版

1　調査区全景（南西から）

2　溝140（北から）

図版２　遺構

1　溝13（北から）

2　井戸131（東から）

3　井戸142（北西から）

瓦1

瓦2

瓦4

瓦7

瓦8

瓦9

瓦14

瓦22

瓦16

瓦18

瓦19

瓦20

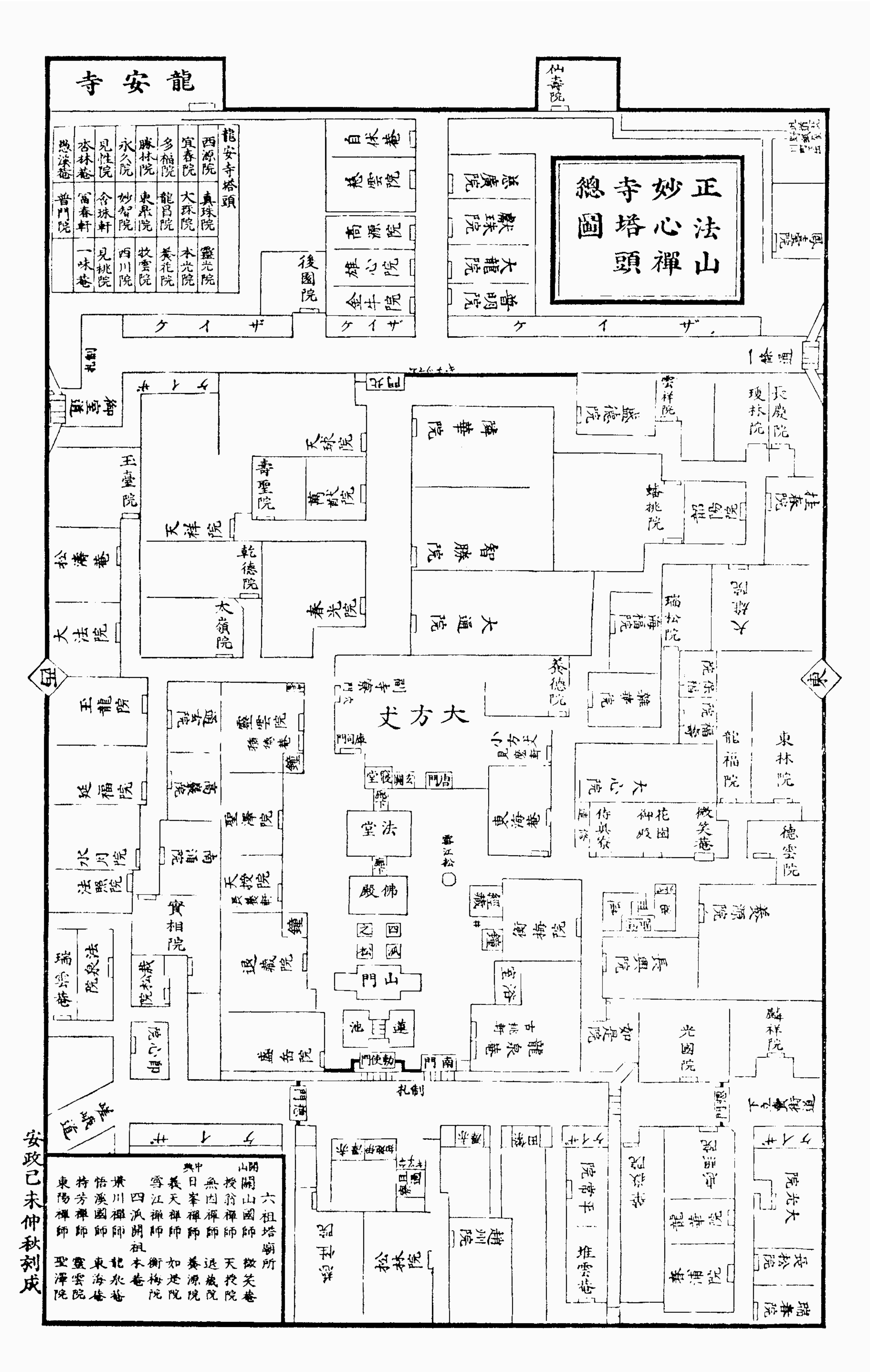
瓦23

瓦25

瓦26

瓦類

図版４　絵図



『正法山妙心禅寺塔頭総図』　安政６年（1859）　妙心寺蔵

報　告　書　抄　録

ふ り が な	へいあんきょううきょういちじょうしぼうに・ななちょうあと
書　　名	平安京右京一条四坊二・七町跡
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
シリーズ番号	２０２０－５
編 著 者 名	小檜山一良
編 集 機 関	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
所　在　地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
発　行　所	公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所
発行年月日	西暦2021年１月29日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
平安京跡（へいあんきょうあと）	京都市右京区（きょうとしうきょうく）花園木辻北町（はなぞのきつじきたまち）１－１他	26100	1	35度01分17秒	135度43分21秒	2020年７月６日～2020年８月12日	268㎡	校舎増築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京跡	都城跡	平安時代	土坑、溝	土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦	平安時代の菖蒲小路西側溝を検出した。 調査地は江戸時代初期に創建された妙心寺塔頭光國院・麟祥院の敷地内にあたる。
		鎌倉時代	柱穴、土坑	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦	
		室町時代	柱穴、土坑、溝	土師器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、瓦、石製品	
		江戸時代	柱穴、土坑、井戸、溝	土師器、焼締陶器、施釉陶器、磁器、土製品、瓦、石製品、金属製品、銭貨、ガラス製品、骨	

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2020-5

平安京右京一条四坊二・七町跡

発行日　2021年1月29日

編　集
発　行　公益財団法人　京都市埋蔵文化財研究所

住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435　TEL 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/

印　刷　三星商事印刷株式会社

住　所　京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093　TEL 075-256-0961